様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月 31 日現在

機関番号：13501
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011～2012
課題番号：23730608
研究課題名（和文）　母娘の関係性が娘の夫婦関係・親役割に及ぼす影響
研究課題名（英文）　The Effects of Mother-Daughter Relationships on Daughter's Marital Relationships and Parent Role

研究代表者
東海林　麗香　（SHOJI REIKA）
山梨大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：90550749

研究成果の概要（和文）：本研究では，娘の生殖家族における夫婦関係および母親役割に，原家族の母娘関係がどのように影響するかについて検討した。その結果，質問紙調査では，自身の母親との関係のよさが，娘の夫婦関係や親役割，子どもとの関係にポジティブな影響を及ぼしていた。また，インタビュー調査では，娘自身が青年期に母親に対して自己開示や相談ができなかったことが，その後の母親に対するわだかまりに関係していること，また，自身の子育てにもそのことが正負の影響を与えていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research examined how mother-and-daughter relationships influence on daughter's marital relationship and maternal role in their family of procreation. The subjects of the questionnaire were 240 mothers of adolescent daughters, 169 adolescent females, 99 adolescent males, 11 mothers of adulthood daughters. The subjects of the interviews were 22 mothers of adolescent daughters, and 12 adolescent males and females. Result showed that (1) the intimate relationships with an own mother had a positive influence on the daughter's marital relationships and maternal roles, (2) Daughter's experiences couldn't disclose herself to her mother in adolescence relate the conflicts between her mother in adulthood.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：母娘関係・家族間葛藤・世代性

１．研究開始当初の背景

本研究は，娘の生殖家族（結婚後に作った家族）における夫婦関係および母親役割に，原家族の関係性，特に母娘関係がどのように影響するかについて，発達心理学の立場から検討するものである。

近年、母娘関係における距離の近さやそこから派生する問題が指摘され、様々なメディアに取り上げられている。特に成人期の娘とその母親との関係に社会的な注目が集まっている（斎藤、2008；信田、2008 など）。また学術的にも、親子の分離・自立の重要性や難しさが指摘され（根ケ山、2006）、特にそ

れは母娘関係において注目されている（柏木・平木、2009）。研究代表者がこれまでに行った新婚期の夫婦間葛藤に関する一連の研究においても、「母親のような家庭が作れない自分へのもどかしさから夫に当たってしまう」「母親のようになりたくないという思いが常にあり、夫との関係も無理をしてしまう」というように、自分たち夫婦の関係性を構築していくに当たって、まず母を参照してしまうというケースが見られた。これらは核家族世帯であったが、同じく研究代表者が行った妻方同居家族（娘家族とその親が同居する家族）を対象とした研究においても、娘夫婦の関係や娘とその子どもの関係に、母娘関係が濃く影響しているケースが散見された（東海林、2010）。例えば「母親（祖母）が娘と孫の＜母親＞となり、娘は自分なりの母親役割を確立することができず、夫との協働した子育てもできないでいる」といったケースがあった。また、海外赴任のために同居を解消した娘夫婦が、それをきっかけに夫婦の関係を再構築し強固にするという事例もあった。

しかしながら母娘ともに、世代間の関係を持つことは必ずしもマイナスではなく、各世代が独立的に生きることが単一の目標となるものではないだろう。少子高齢化、女性の社会進出といった社会状況の変化から、子どもが結婚した後も互いが原家族における関係性を頼り、拠りどころとするような状況はさらに増加するものと思われる。特に、幼児期から児童期の子どもを持つ母親にとっては、職場復帰などの社会参加への余裕ができながらも育児にサポートの必要な時期である。それによって母娘関係が物理的にも精神的にも近くなり、＜親同士としての関係＞＜母娘としての関係＞の間で揺れ動き、依存と自立という親子関係をめぐるアンビバレンスがより可視化されると考えられる。またこの頃から夫が家事育児から遠ざかる傾向にあり夫の不在感が高まる可能性も高い。このような時期に個として、そして生殖家族として発達を遂げることと、原家族との関係を保ち続けることをどのように両立させ、これからも長く続くであろう関係を無理なく、良好に築いていけるのだろうか。

このような背景から本研究では、＜娘の配偶者との関係発達＞＜親としての発達＞に、母娘関係がどのように影響するか、またその影響プロセスを横断的・回顧的に検討することで、娘世代の家族発達の促進要因および阻害要因について考察することとする。

２．研究の目的

（１）質問紙調査により、思春期～青年期の娘を持つ女性の夫婦関係および母親役割と、母との関係性との関連の仕方を類型化する。比較対象として，青年期男女，成人期の娘を持つ女性にも，母子関係について尋ねる。

（４）思春期～青年期の娘をもつ女性を対象とした回顧的インタビューにより、（１）の類型の生成プロセスについて検討し、各類型における家族間コミュニケーション・パターンの共通性と差異について整理する。比較対象として，青年期男女にもインタビューを行う。その上で、夫婦関係への母娘関係の影響モデルを提出する。

３．研究の方法

質問紙調査およびインタビュー調査を行った。

質問紙の構成は，（１）フェイスシート：年齢，学年，家族構成，居住形態。（２）母子の心理的距離：母子密着尺度（藤田，2003），32 項目，5 件法。（３）母子間コミュニケーション態度：夫婦間コミュニケーション態度尺度（平山・柏木，2001）を母子関係に適用できるよう改変した 22 項目，4 件法。ポジティブな態度「共感」「依存･接近」，ネガティブな態度「無視・回避」「威圧」の４側面からなる。（４）精神的自立：精神的自立尺度（福島，1992），22 項目，5 件法。「将来志向」「適切な対人関係」「価値判断・実行」「責任」「社会的視野」「自己統制」の 6 側面からなる。（５）夫婦関係満足尺度（諸井、1996）：6 項目、4 件法。（６）親役割診断尺度（谷井・上地、1993）：オリジナルから抜粋した 24 項目、3 件法。（７）自己評価式抑うつ尺度，20 項目，4 件法，であった。（１）から（３）（７）は全対象者共通であるが，（４）は青年期，（５）（６）は既婚・有子の対象者のみが回答する。協力者は思春期・青年期の娘をもつ女性（240 名）を中心に，比較対象として青年期女性（169 名），青年期男性（99 名），成人期の娘を持つ女性（11 名）であり，青年期男女については各種高等教育機関で協力者を募集し，成人期以降の女性については，インターネット・NPO 等の集会・知人に手渡しといった方法で協力者を募った。

インタビュー調査では，青年期～成人前期の娘を持つ女性（22 名）を対象に，比較対象として青年期男女（12 名）に母親および娘とのライフヒストリーを聞き取った。インタビューは対面･電話・メールのいずれかを協力者の希望によって選択してもらった。対面および電話インタビューの所要時間は約 1 時間から 2 時間半であった。自身に向けた娘・母の言葉や行動で，【いい意味で】【悪い意味で】印象に残っていることを，時系列的に語ってもらった。自発的に語られなかった場合に，以下を尋ねる。①あなたと娘・母との関係性について，②ご両親の【夫婦としての関係性】

について，③娘・母との間の葛藤について，④あなたと娘・母のあいだで，現在でも解決していないことや納得がいっていないことについて，⑤あなたにとって，＜母親＞とはどんな存在か，⑥あなたにとって＜母親＞と＜父親＞の違いは何か，である。子どもが男女いる場合には，双方について尋ねた。

４．研究成果

質問紙調査では，母子密着度，コミュニケーション態度を独立変数，精神的自立，夫婦関係，親役割，抑うつ度を従属変数とした分散分析を行った。その結果，その結果，青年期男性では，心理的自立の下位尺度＜適切な人間関係＞　について，母子密着度の主効果（ｐ＜.05）および母親に対するネガティブなコミュニケーション態度の主効果（ｐ＜.05）がみられ，抑うつ度については，密着度とネガティブ態度の交互作用（ｐ＜.05）がみられた。青年期女性では，心理的自立の＜将来志向＞＜責任＞について，母子密着度の主効果が見られた。思春期～青年期の娘をもつ女性については，抑うつ度について，母親に対するネガティブなコミュニケーション態度の主効果（ｐ＜.05）がみられた。青年期では，男女ともに母親との心理的距離の近さが心理的自立の下位尺度のいくつかの側面のみに影響し，成人期女性では，母親との関係性と自身の夫婦関係・親役割への影響はみられなかった。これは，母子の関係性を測る項目の選定によると思われる。本研究では，過去の辛い出来事を想起させるような質問を避け，項目選定を行った。その結果，昨今注目されている「アンビバレントな親子関係」について十分に捉えることができなかったと考えられる。今後はこの点も考慮し，親子関係の複雑さを捉えられるような項目作りも視野に入れた研究が必要であろう。

質問紙調査の結果だけでは母娘関係の類型化が十分ではないと考え，複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model（TEM)）を用いて，インタビュー協力者のたどってきた母娘関係のプロセスを類型化することを試みた。質問紙調査では，夫婦関係に関する有意な結果が得られなかったので，ここでは母娘関係のみに焦点を絞ることとする。

TEM は，時間を捨象せず，個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする文化心理学の方法論であり（サトウ・安田・木戸・ヴァルシナー，2006），TEM では，異なる径路をたどりながら類似の結果にたどり着く等至性を実現する点を＜等至点（Equifinality Point，EFP)＞と呼び，研究の焦点を等至点に設定する。本発表では，調査時に「現在でも解決していないことや納得がいっていないことがあるかどうか」という「わだかまり」の有無を等至点とし，そこに至るプロセスを＜分岐点：Bifurcation Point，BFP＞＜必須通過点：Obligatory Passage Point，OPP＞と共に時系列図を作成し，整理した。そこから，母親に対して抱くわだかまりに共通する経験が見出された。協力者（成人期女性）全員が経験することがらとして，（１）思春期・青年期の困難，（２）進路・嫁ぎ先の自己選択，（３）進学・就職に関わる離家の経験，（４）自身が母となってからの，思春期・青年期の娘との葛藤，の４つを必須通過点（OPP）に設定した。加えて，実現可能な複数の径路が用意されている点として，（１）青年期における母親への自己開示・相談，（２）離家の持つ意味，（３）離家のあと，実家に戻るかどうか，（４）娘との葛藤の帰結，の４つを分岐点（BFP）として設定した。

これらの点とそこに至るプロセスを整理すると，青年期に母親に対して自己開示・相談の経験がない場合は全て＜わだかまりあり＞群，ない場合は全て＜わだかまりなし＞群であったが，その間の径路は多様であった。また，どちらの群でも同じく経験する事柄があった。例えば，娘との葛藤の際に「あえて母と異なる対処をする」のは，「否定された経験を持つ」者のみではない。また，「あえて母と異なる対処をする」ことで娘との葛藤が解消され，それによってさらに母に対するわだかまりが高まることもあれば，葛藤が解消されずに継続することにより，母に対するわだかまりが高まることもあった。今回のデータの範囲では，娘が思春期～青年期にこれまでとは質が違うように思われる解決困難な葛藤を経験し，その際に，自身が同じ年頃だったころに母がした対応と異なる対応をあえてしたケースでは，それが葛藤のどんな帰結に結びついたことによって母へのわだかまりが継続か否かと関連していると考えられる。本研究の結果により，親子関係を検討する際に，複数の世代にわたる検討が必要なことが示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）

(1) 東海林麗香（2013 年 3 月 17 日）母娘の関係性が娘の夫婦関係・親役割に及ぼす影響（２）―青年期の母子関係および精神的自立の男女比較からの検討―　日本

発達心理学会第 24 回大会（明治学院大学）

(2) 東海林麗香（2012 年 10 月 6 日）母娘の関係性が娘の夫婦関係・親役割に及ぼす影響（１）―青年期における精神的自立に焦点を当てて―　日本パーソナリティ心理学会第 21 回大会（島根県民会館）

〔その他〕
ホームページ等

(1) 東海林麗香(2013)言の葉巡り vol.19　互いに自立した存在であることが，より良好な母娘関係を築く（女性の心理と下着の研究サイト　ココロス，管理・運営：株式会社ワコール）
http://www.cocoros.jp/word/vol19/

６．研究組織
(1)研究代表者
東海林　麗香（SHOJI REIKA）
山梨大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：90550749

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし